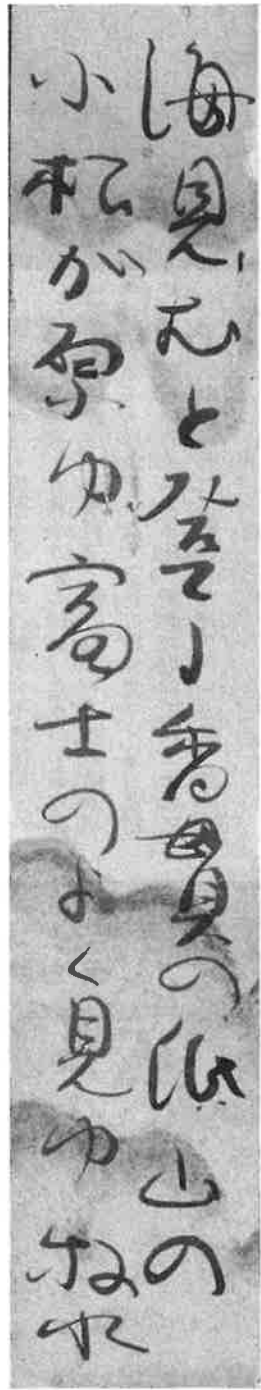


# 沼津市若山牧水記念館

第15號 1995.12.30.

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 Tel(0559)62-0424  
〒410 沼津市千本郷林1907-11 Fax(0559)62-0424



## 香貫山のうた

海見むと登る香貫の低山の

小松が原ゆ富士のよく見ゆ

牧水

今年の夏頃からこの歌を書いた短冊が、牧水記念館の展示室にある。私の記憶では、この歌を書いた短冊を見たのは、実に今回が初めてのことである。

「書」については全く門外漢の私にも、一見して闊達な筆はこびとか繊細柔軟な筆触など、言葉に尽くせない風情が感じられた。文字が表す、見る者を酔わせるようなエモーショナルな表情は、やはり牧水ならではのものだ、短冊の前で改めて思った。

すでに気付いた方もあると思うが、この歌の初句「海見むと」は、歌集の方では「海見ると」と変えられている。私見を述べさせてもらえば、「ウミミント」というよりは「ウミミルト」と歌い出した方が厚みもあるし響きもいい。ひよっとするとこの短冊を書いた時期が、歌集上梓以前であったのかも知れない。つまり歌が出来上がった直後ということだ。もしもその想像が当たっていたなら、この短冊は、まさに文字通り逸品と言ってもよさそうである。

この短冊は、沼津牧水会会員の漆間幸子さんからの寄贈によるものだ。漆間さんは、現在小原流の生花を教えて沼津市本郷町に住んで居られる。本郷町と言えば牧水一家が住んでいた「香貫の家」があった処。つまり、漆間家の人達はある期間、牧水と眼と鼻の場所を過ごしていたことになる。もしかしたら、両家に交友があった事実を、この短冊は密かに告げているかも知れないのだ。

この歌は、牧水が大正九年夏に東京から移住してきて、沼津で最初に作った三首の中の一首である。香貫山香陵台にある歌碑の歌、

香貫山いたゞきに來て吾子とあそび

ひさしくをれば富士はれにけり

もその一連に含まれており、歌集「くろ土」によれば「香貫山」というタイトルがあり、次のような詞書も付けられている。

八月中旬、東京を引拂ひて駿河沼津在なる楊原村香貫山の麓に移住す。歌を詠み始めたは九月半ばなりけむか。

初めは海を見ようと思つて登つた香貫山だが、そこで、はからずも富士山を見た。この歌には未知の土地に対しての、素朴な驚きと賛美の思いが歌い込められているように思われてならない。自分たちがこれから生活する土地の山河へ向けて、幸せを祈るべく発せられた、いわば「土地褒め」の歌とも受け取れるのだ。

この短冊を牧水記念館に展示できたことは、まさに「錦上に花を添えた」ことだと思う。

(上田治史)

# 『平成の歌合』 うたあわせ

## 始末記

須永秀生

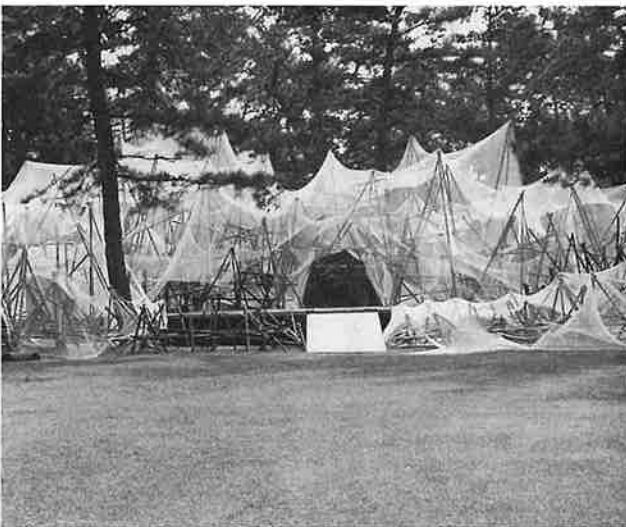
(沼)沼津牧水会理事



沼津市を主体とした実行委員会の手で開催された「ジャパン・アート・フェスティバル・イン沼津」の先陣行事として「松籟の宴」が、御用邸記念公園において催されました。筑前琵琶・大田染・雅楽・地域の演芸と盛り沢山の行事が菊祭りまで続いたものですが、この松籟の宴に、(沼)沼津牧水会が特別協力団体として『平成の歌合』を計画・実行いたしました。伝統芸術の中に文化的な面を入れたという市にぎわい企画課の要請を受けて、平安時代から鎌倉時代にかけて宮中や貴族の間で盛んに行われていた『歌合』を、平成の今に再現してみようと試みた企画です。

判者を沼津市在住の「うた」主宰・毎日新聞短歌欄選者の玉城徹先生にお願いし、講師を県歌人協会会長「水麴」代表の高嶋健一氏、同じく県歌人協会副会長兼事務局の上田治史氏に依頼。短歌の詠み人(方人)には、沼津市内より青木朝子・浅井不二雄・鈴木計一・坂部マリ・川口和子・小野徳司・八代厚・上杉有・近藤ゆみ子の諸氏、清水町の岡本淳子・前田鉄江・鈴木利子・渡辺和彦・小野美津子・向笠律子・杉山郁子氏、三島の新井愛子・星谷重紀氏、長泉の君山宇多子氏、函南の塩谷千鶴子氏の二十名に参加していただき、九月三十日の夜、華やかに行われました。

衣装は、平安時代の衣冠束帯を考えたのですが、



高価なためやむを得ず紙衣をデザインして制作、見た目には何となく雰囲気が出たようでした。『歌合』は高嶋・上田両氏の熱のこもった作品批評と、玉城先生の絶妙な判定もあいまって、さながら平安の御代にいる如く、百に余るギャラリーの方達も満足された一時間だったと聞いています。方人達にとっては、ただ参加するだけでなく、自分の作品がその場で評価され、勝負が決まるわけですから大変な負担だったと思いますが、よく協力してくださりました。なお、正面に飾った柿本人麻呂の肖像画は浅間町の鈴木みなえさんをお願いし、装丁は藤井原の清光庵・岩本与志克氏のご好意によりました。多くの方のご尽力で初めての試みが無事開催できましたこと感謝して報告に代えさせていただきます。

# 第四十二回沼津牧水祭

## 碑前祭・芝酒盛 十月十五日

第四十二回の沼津牧水祭碑前祭・芝酒盛が今年も盛大に行われました。若山旅人当館館長の代理として次男純氏夫妻・桜田光雄沼津市長・五月女武教育長・川口末吉市議会議長の参列を得、秋晴れの絶好の日和にめぐまれ、東京牧水会の和田会長・田原事務局長をはじめ多くの参加者が集い、会は盛り上がり、東海庵さんの抹茶も出切り、お酒も底をつき、花柳検師匠の舞踊に酔い、沼津合唱団の合唱、岳心流沼津愛吟国風会の合吟、沼津松波会煙火太鼓・裾野五竜太鼓保存会の太鼓等々、午後二時までの時間が短く感じられる一日でありました。

## 短歌大会

十月二十九日

短歌大会は二五〇首の投稿を得、「短歌人」の編集担当人小池光氏を講師に迎えて、沼津市立図書館四階の視聴覚室で行われました。

午前中一時間の小池光氏の講演は、「短歌のことはことばの短歌」と題して、『はじめにことばありき』短歌はことばで成立する。短歌がことばで成り立てば、読む側もことばをことばとして受け止める。ことばは物があつて成立するが、ことばが物を成り立てるとも考えられる。』と、話されました。この理論は、このところ話題になっており、例えば「私の思想は他者の言葉で成り立っている。』などの話は哲学的ですが、具体的な「山」についての話は判りや

すく説得力があつて、参加者は大きくうなづいていました。

午後は投稿作品の批評で、多くの作品に触れられました。時間が短いため一首にかける時間が少なく、語る方も聞く方も大変なようでした。

以下、選者選の牧水賞三首と他の七首、及び互選賞の五首を紹介します。

### 牧水賞第一席

道に迷ひ地下道出づれば重おもとりズムを打ちて飛行船がゆく  
朝比奈ふく

### 牧水賞第二席

昨夜見し夢の目出度さわれ若く怒りて悪をこらさむと行く  
小野 徳司

### 牧水賞第三席

大ゆのみに五杯も飲みし黄楊柳売りの老人は十年を来ぬ  
田中 千代

御物なる白磁の壺にふるると眠るみどり児ひぎに置きたり  
高橋 啓一

一年に一度と待ちし旅の夜を語る間もなく農婦の眠る  
山田 旭子

亡き母の着物を解けば掛衿に妻楊子一本刺されておりぬ  
石川つや子

サーカスに攫はれそこね三人の子の母となり今ばばとなりぬ  
前田 鉄江

掃除機の古きを噛み電機屋が暗黙のうちに買ひ替へを言ふ  
郡山 敏子

広告の淫靡なる裸婦頭の上に揺るる車中は鬱がかぶさる  
星屋 亜紀

密度濃き秋の真闇に風たちて窸出しの壺のつぶやきも絶ゆ  
樽松 文子

### 互選賞（一位より五位まで）

一人より寂しき日日のあるものか子と住む老にあらたな孤独  
深川かね子

それぞれの家風に馴染みて行く子等を金婚の座より夫と見守る  
山中さち子

核心を問はず語らず君とゐて無機物のごと風に吹か  
林 和

男らを棒立ちさせてクレーンに鉄骨を吊る若き女は  
土屋さち子

取りたての栗を持ち来て寡婦われに友は亭主の愚痴も置きゆく  
服部 美枝

## 第六回「中学生短歌コンクール」

今回の中学生短歌コンクールは締切を七月末に早めて行われた。応募数は八中学校一〇〇四首で、毎年参加校・応募人数が増えていることは望ましい方向に思っている。

以下、特選十首を簡単な寸評と共に紹介する。

遠くのほうで犬がさかんに吠えている風がガラス戸をゆるがす夜に  
長井崎中 米山 和広

今日こそはでも声かける勇氣なく通りすぎてく背中みつめる  
大岡中 高田麻衣子

太陽の光をいっばいあびたからまっかなトマトは太陽のあじ  
原中 塩崎 江里

風鈴の音がする庭で食べようか虹色シロップかけたかき氷  
原中 鈴木 裕子

ふるえる手けんぱんに手が触れるときリズムをとつてる心ぞうの音  
原中 福田由布子

參觀日いつも早目に来てくれる母の匂いは春風に似て

第四中 浅井 美保

雨にぬれ一羽の鳩がさびしげにペランダの上で動かずにいる

門池中 日吉 鉄平

短冊に心写した願いごと風に揺れつつ見えかくれする

原中 土屋 光代

泣き顔を見せたくないよあの人に笑顔が似合うわたしだもんね

静浦中 小柴 麻以

君の声とどかないほど遠くないまた会える日をいつまでもまつ

第五中 遠藤真理子

犬の声とガラス戸を揺るがす風、太陽と真つ赤なトマト、虹色のシロップ、母の匂いと春風など感覚的な作品が幾首が見られたのが収穫。ふるえる手はピアノの発表会の際の作品か、リズムをとってる心臓の音がいい。雨にぬれた鳩、短冊の願いごととは率直な表現が楽しい。愛の歌三首の中では「今日こそは」が、ほのかな想いを述べて出色。

(須永 秀生)

### お知らせ

## 雑の歌会

平成八年三月三日(日)午後一時半

沼津市若山牧水記念館会議室

講師 今野 寿美氏

「りとむ」同人

参加希望者は、当会事務局へお問合せください。

## 牧水歌碑が新たに建立

平成七年十月二十一日除幕

秋田市千秋公園

鶉めじろ山雀つばめなきしきり  
さくらはいまだひらかざるなり



秋田県では最初の牧水歌碑が秋田市千秋公園に完成し、十月二十一日除幕式が行われた。この歌碑は、秋田ライオンズクラブが宮崎県延岡市の向洋ライオンズクラブと友好交流協定を結んだのを記念して建立したもので、「鶉めじろ山雀つばめなきしきりさくらはいまだひらかざるなり」の一首が刻まれている。この歌は、大正五年四月下旬秋田市を訪れた牧水が千秋公園を散策しながら詠んだものである。

高さ二・三メートルの白御影石でできた碑には、牧水自筆の短冊を拡大した歌が彫られ、黒御影石にエッチングされた牧水の顔写真がパネルにしてはめ込まれたユニークなものである。

除幕式には、両ライオンズクラブ関係者のほか、石川錬治郎秋田市長、市長の大学時代の友人佐佐木幸綱早稲田大学教授、宮崎県東郷町の牧水顕彰会事務局長でもある渡辺邦彦教育長等の来賓が出席した。病気のため出席できなかった牧水の長男旅人氏に代わり、旅人氏の長女榎本眞子、尚美ご夫妻の手で歌碑の除幕が行われ、歌の朗詠に続いて参加者全員が碑に献酒し、新しい歌碑の建立を祝った。

また、旅人氏から寄せられた祝歌「旅さな秋田にやどりし父のうたふかきゑにしに今日さざまれぬ」が、榎本ご夫妻から披露された。眞子さんは「このようなすばらしい場所に建てていただいたうれしい。顔写真入りは初めてです。しかも、顔写真は仏壇に飾ってあるのと同じものなので、祖父をととても身近に感じます。」と歌碑の建立を喜んでいました。

なお、当会からは、林茂樹理事長が石川秋田市長から招かれ、除幕式に列席した。